

## □寄稿□

## 医療ツーリズム（国際医療交流）に関する国際シンポジウムの開催

岡村 世里奈\*

## I. はじめに

日本でも「医療ツーリズム (Medical Tourism)」という言葉をよく耳にするようになった。最近では、「国際医療交流」というのが公式な言葉となっているが、ここではわかりやすくするために「医療ツーリズム」ということにする。医療ツーリズムとは、ツーリズムという言葉が使われているが、観光は必ずしも目的ではなく、患者が医療を受ける目的で他国を訪問することをいう。

タイやシンガポール、インド、韓国等のアジア諸国では以前から国策の一環として医療ツーリズムに力を入れてきたが、わが国でも2010年6月に発表された新成長戦略において国際医療交流（外国人患者の受け入れ）を促進することが決定されたことから、2013年度の本格受け入れ開始に向けて、関係省庁や地方自治体、企業、医療機関等において様々な検討や取り組みが始まっている。また、新聞や雑誌においても、医療ツーリズムに関する特集が組まれるようになってきている。しかし、これらの動きを見ていると、医療ツーリズムに関する検討や議論が必ずしも十分尽くされていない感があった。そこで、国際医療福祉大学大学院では、私学助成研究事業「病院の国際化と東アジアの医療」（主任研究者：開原成允）の一環として、2010年の3月と8月の2回にわたって医療ツーリズムに関する国際シンポジウムを開催した。以下では、その主な内容について紹介する。

## II. 国際シンポジウム「メディカル・ツーリズムの国際的動向と日本の課題」（2010年3月22日開催）の概要

第1回目のシンポジウムは、2010年3月22日、「メ

ディカル・ツーリズムの国際的動向と日本の課題」というタイトルで、国際医療福祉大学大学院の東京青山キャンパス5Fホールで開催された。

第I部の「メディカル・ツーリズムの国際的動向と日本」では、近年急速に発展してきている国際的な医療ツーリズムに関する理解を深めるため、筆者の方から、医療ツーリズムの国際的状況について紹介した後、医療ツーリズムの先進国の1つであるドイツにおいて指導的立場にあるデッケンドルフ大学のクンフルト教授 (Prof. Dr. Horst Kunhardt) から、ヨーロッパやドイツの医療ツーリズムに関する基調講演が行われた。クンフルト教授によると、最近ではヨーロッパにおいても医療ツーリズムは無視できない流れとなっており、ドイツにおいても、保険外収入の獲得を目指して医療ツーリズムに取り組む医療機関が増えてきており、また、地方自治体や国も地域の活性化や国際的な交流の促進を目指して、医療機関のこのような取り組みを全面的にサポートしているということであった。その結



基調講演を行う Prof. Dr. Kunhardt

\* 国際医療福祉大学大学院 医療経営管理分野 准教授

果、ドイツに来る外国人患者数は年々増加しており、2006年時点では約47万人の外国人患者がドイツに来て治療や健診等を受けているということであった。

第Ⅱ部の「メディカル・ツーリズムと日本の課題」では、日本の医療ツーリズムの現状や課題に対する理解を深めるため、日本で外国人患者の受け入れに積極的に取り組んでいる医療機関や、海外からの外国人患者の仲介を行っている斡旋事業者等から、その現状や課題について報告してもらった。中でも、聴衆の高い関心を集めたのが、癌研究会有明病院の金起鵬(キム・キブン)氏からの報告であった。金氏によると、有明病院では2005年からインターナショナルセンターを設置して海外からの患者に対応しており、月間30件程度の問い合わせがあるということであった。また、金氏からは、有明病院で実際に治療を行ったロシア人患者(後腹膜肉腫)や米国人患者(胃がん)等の具体的事例が紹介された。金氏によると、これらの経験から、今後、日本の医療機関が外国人患者の受け入れを行えるようにするためには、既存のビザ制度の見直しや医療通訳の整備、医療訴訟に対する法的防御等が必要になってくるのではないかということであった。

なお、本シンポジウムでは、講演終了後、「日本におけるメディカル・ツーリズム—その可能性と克服すべき課題—」というタイトルで、講演者と聴衆を交えてのパネルディスカッションを行った。このパネルディスカッションでは、会場から様々な質問や意見が出

されて議論が行われたが、中でも特に議論が白熱したのが、日本の医療機関は日本人の患者であふれており、日本人の患者さえ十分診療が受けられないのになぜ外国人の患者を診療しなければならないのかということであった。この点については、日本において患者があふれているのは、厚労省が病床を規制し、医師数を制限しているからである。いわば政策によって作られている状態なのであるから、この規制を撤廃すれば、この問題は解決するのではないかという意見が寄せられた。この意見に対しては、聴衆の一人として本シンポジウムに参加していた厚労省の政策担当者の方から、日本の医療が「日本人による日本人のための医療」となっていることを認め、厚労省としてもこの問題について真剣に検討しているとの発言があった。また、経済産業省や観光庁の関係者からも、政府の中でもこの問題については認識されており解決を図っていこうという雰囲気にあるという発言があった。

本シンポジウムは、医療関係者や行政関係者、学識経験者、企業関係者等が一堂に会して日本の医療ツーリズムについて話し合う初めてのシンポジウムということで高い関心を集めたが、以上の内容からも分かるとおり、日本の医療ツーリズムはまさに始まったばかりであり、その方向性についても確固たるものが示されているわけではない。また、その実施にあたっては、個々の医療機関レベルでも、国レベルでも多くの課題が山積しており、今後さらなる議論や検討の必要性をひしひしと感じさせたシンポジウムであった。



パネルディスカッションの様子

### Ⅲ. 国際シンポジウム「国境を越える患者と病院」

#### (2010年8月28日開催)の概要

上述したとおり、医療ツーリズムに関してはさらなる議論や検討が必要とされたことから、国際医療福祉大学大学院では、2010年8月28日、医療ツーリズムに関する第2弾目の国際シンポジウムを開催した。本シンポジウムは、6月に発表された新成長戦略において、政府の方針として国際医療交流(外国人患者の受け入れ)を推進していくことが決定された直後に開催されたものだったことから前回以上の注目を集め、会場に



きる日本の医療技術等を明らかにする、②外国人医師・看護師による国内診療等の規制緩和の検討・実施、③外国人患者の受け入れに関する医療機関認証制度の整備、等を進めていくということであった。

第I部では、以上のような日韓の行政担当者による話を聞いた後、「外国人患者の受け入れと政府の役割」について聴衆を交えたパネルディスカッションを行った。

このパネルディスカッションには、講演を行った日韓の行政担当者と共に、外国人患者の受け入れに先駆的に取り組んでいる亀田メディカルセンター特命副院長のジョン・C・ウォーカー氏ならびに順天堂大学病院の総合診療科先任准教授の久岡英彦氏にもパネリストとして参加してもらった。ウォーカー氏からは、亀田メディカルセンターでは、国際認証制度である JCI (Joint Commission International) を取得したり、ロシアや中国、米国からの外国人患者を積極的に受け入れたりするなど、病院のグローバル化に取り組んでいるが、言葉の問題やカルテの問題、医療訴訟対策の問題等、多くのチャレンジがある。韓国の医療機関が医療ツーリズムを行えているのは政府が積極的に支援しているからであり、日本においても医療ツーリズムを推進していくためには、各医療機関の努力も重要だが、



パネルディスカッションの風景

政府による支援も欠かせないとの発言が寄せられた。この他にも、このパネルディスカッションでは、聴衆から、医療通訳者の制度化や認証制度に対する質問等が相次ぎ、医療ツーリズムに対する国の姿勢や方向性に対する関心の高さが窺われた。

## 2. 第II部「国境を越える病院」

第II部では、医療ツーリズムから少しテーマが離れるが、最近、日本の医療機関の中には、海外進出を考えるところが出てきていることから、「国境を越える病院」というテーマで、日本の医療機関の海外進出(今回は中国を対象)について議論を行った。具体的には、2つの医療機関の中国進出事例を紹介した後、中国の医療事情に詳しいパネリストを交えてパネルディスカッションを行った。このパネルディスカッションでは、パネリストから、日本の医療機関が中国で病院を開設しようとしても、容易には申請がおりず、また、法的にも対応が難しい面が多々あること等が指摘された。

以上、国際医療福祉大学大学院が開催した医療ツーリズムに関する2つの国際シンポジウムの概要について紹介したが、本シンポジウムは参加者からも高い評価を得ており、また、その内容は複数の新聞、専門誌、TV番組等でも取り上げられた。これらはひとえに、本シンポジウムを全面的に支援していただいた大学やシンポジウムに参加されたゲストスピーカーの方々の協力の賜物ともいえよう。周知のとおり、医療ツーリズムの実施に関しては賛否両論分かれているが、そのような重要なテーマについて多角的な視点で分析を行い、医療関係者や社会に対して情報発信していくことは本大学院の重要な使命の一つと考えている。大学院では、今後とも、医療ツーリズムや医療の国際化の問題について様々な形で情報発信を行っていききたいと思う。